

# 米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く 82

## 上田 勇助

— まいばらの先人④ —

### 職人のまち・上丹生

醒ヶ井駅から丹生川をさかのぼり、  
靈仙の山ふところに抱かれた上丹生の集落に入ると「木彫の里」「丹生仏壇」などの看板が並んでいます。江戸時代の末期、上丹生は木彫の村として知られるようになりました。明治の中頃にかけて、仏壇の需要が増加すると、製作の技を磨くため、集落内で師匠を求めて修業に励む人が出てきました。湖北は真宗王国で、屋根は昔ながらの草ぶきながら、重厚な仏壇が収まっているのが、湖北民家の風景でした。さらに、戦後の高度経済成長期には、作れば作るほど売れるという時期がありました。が、産業の近代化は、安価な製品を海外に求めるようになり、伝統工芸としての仏壇は引き合わなくなり、後継者問題も抱えるようになりました。

しかし、上丹生の職人たちは、常

に新分野への進出を試みています。靈仙の杉や松を素材とした木彫り工芸品を創作して海外貿易を図り、金不足の戦時中には木製の日用品が考案されました。また、焼き杉の家具や床の間の置物が上丹生で考案・製作されると、たちまち日本各地に焼き杉技法が普及していきました。仏壇の仕事で技を磨いた職人がたくさん住む上丹生では、その技が相乗的に磨かれ、技は仏壇の枠を越えて、社寺の彫刻工芸や各地の曳山などの彫刻に発展し、各地に洗練された先人たちの技の跡が残されています。日野町や大垣市、垂井町の曳山・豊川稲荷本殿・仏光寺派本山山門の彫刻などが、醒井地域の彫り物師の作品として知られています。

### 一四歳で京に上る

江戸時代の寛政年間（一七八九～一八〇一）、上丹生の上田勇助と川口七右衛門の二人は、京で彫刻を学び、帰郷して上丹生成光寺本堂の欄間の雲龍、氏神神明神社本殿などの彫刻を完成させて、周囲の目を見張らされました。やがて仏壇彫刻にも取り組み、多くの弟子を養成した勇助は、木彫の祖といわれています。勇助の父は、寺社の堂大工をしていた長次郎で、長男長七には家業を継がせ、次男勇助に堂大工の仕事に欠くことができない彫刻の技を身に付けさせようと、一四歳の勇助と同郷の七右衛門を京に送りました。一二年の修行ののち、まず七右衛門が、続いて勇助も帰郷し、上丹生彫刻の礎を築くことになりました。勇助の帰郷は文化一二年（一八一五）のことと伝えられています。山間地で、水田や畑がきわめて狭い上丹生ですが、背後に控える靈仙山地の豊かで良質な木材資源を活かすために、勇助たちは京へ上ったのです。

社寺建築の彫刻部分を荒物といい、仏壇・仏具の彫刻を小物とよびますが、二代目勇助（藤助）は安政四年（一八五七）頃から小物彫刻を本格的に始めたといわれています。上丹生

は長浜の浜仏壇を主に生産し、丹生仏壇の名でも出品されてきました。また、仏壇作りには七職（木地師・木彫師・塗り師・箔師・鋳職・屋根師など）とよばれる各種職人の高度な技が結集されています。各職人が上丹生にそろった明治末期には、一貫した仏壇生産が行われるようになり、仕事場が家ごとに並ぶ現在の集落景観が見られるようになりました。奈良時代、丹生出身の息長丹生真人一族は、奈良の都にいて、東大寺建立の画師集団として寺院の造営などにかかわっていたようです。高度な技術や情報を取り組む氣質が、木彫という形で、現代まで脈々と受け継がれているようです。

（歴史・文化財保護室）



▲ 神明神社本殿彫刻